

英米文学の名作を読むVI

研究発表会

日時

平成30年
2月24日(土)
13:00~15:00

要旨

E.M.フォースター(1879-1970)は、T.S.エリオット(英国の詩人・評論家)と同時代の英国作家である。知識人であることを標榜したエリオットに対し、フォースターは教養と感性に裏付けられた、寛容の作家とも位置付けられる。

『ハワーズ・エンド』(1910)は、ドイツと英国の血が混じった英国中流階級の姉妹、マーガレットとヘレンが田園邸宅ハワーズ・エンドを主舞台に、階級内・階層間の架け橋となる。

姉マーガレットは実業家ヘンリー・ウィルコックスと結婚に至り、亡きルース夫人の霊がこもるハワーズ・エンド邸に住む。一方妹のヘレンは、下層の都市居住者レナードの子を宿す。中流階級内での各階層間のそれぞれの思惑の違いが、姉妹によって結び付けられていく過程が描かれる、この小説の試論的考察を試みる。

演題

E.M.フォースター
『ハワーズ・エンド』
—散文と情熱の虹の架け橋—

発表者

宮内 泰彦
(元聖徳大学兼任講師)

司会

原 公章
(元日本大学教授)

日時

平成30年
3月17日(土)
13:00~15:00

要旨

トマス・ハーディ(Thomas Hardy, 1840 - 1928)の最も有名な小説である『ダーバヴィル家のテス』(Tess of the D'Urbervilles, 1891)は、彼の作品の中でも、きわめて安定したリズムの中でドラマが展開してゆく。その雰囲気から、すでに予定された『運命』に忠実に、テスに従ってゆく過程を描いた作品であるとも言える。テスの人生は何であったのか。テスの辿った悲劇の本質は何なのか。テスはなぜ死ななければならなかったのか。数多くの論及がなされているが、それらの解釈の多くはいわゆる運命論である。自然主義文学の最高峰とも評されるこの作品は、運命論はもちろん、テスをめぐる恋愛論を超えての解釈も可能であろう。本発表では、これまでの運命論とは異なり、作品全体における19世紀という時代の基督教の位置づけを再検討し、主人公テスがなぜストーンヘンジ(Stonehenge)の周辺で死を迎えるのか、さらにこの作品はなぜ彼女の死とともに結末を迎えるのか、を考察していきたい。

演題

T・ハーディ
『ダーバヴィル家のテス』
—ストーンヘンジと
基督教を巡って—

発表者

小山 努
(聖徳大学兼任講師)

司会

藤井 繁
(聖徳大学名誉教授)

会場

聖徳大学生涯学習社会貢献センター
(聖徳大学10号館)12階
千葉県松戸市松戸1169
JR常磐線・新京成線「松戸駅」下車、東口徒歩1分

定員

70名
事前申込不要

お問い合わせ

聖徳大学言語文化研究所(知財戦略課)

〒271-8555 千葉県松戸市岩瀬 550

電話: 047-365-1111 (大代表)

<http://www.seitoku.ac.jp/chizai/event/>

会場
アクセス

